

ブバルディアの東京オリジナル品種の開発

~第1期の3品種の試験栽培をスタート!~

ブバルディアは伊豆大島の特産切花であり、温暖な気候を活かし一年を通して生産され、東京 市場ではシェア第1位を誇ります。しかし近年では、海外育成品種の利用によるコスト増加など が大きな課題となっており、伊豆大島で栽培しやすく省コストな東京オリジナル品種の育成が強 く求められています。

農総研では、育種素材を収集・評価し、育種手法を確立するとともに、交配により作出した約 3700株の実生個体の中から花の色や形態、花着きなどの優れる約200個体を一次選抜しました。 さらに東京都島しょ農林水産総合センターや生産者の協力のもと、伊豆大島で栽培評価を行い、 選抜を進めました。そして、第1期3品種(図1)の育成を完了し、農水省に品種登録出願しま した(2019年8月出願公表)。

この3品種は、ブバルディアらしい可憐な一重咲で、伊豆大島の従来品種よりも花が大きくボ リューム感があります。また、樹勢が強く、高い収量が見込まれます。この3品種は、東京都の オリジナル品種普及対策事業の対象品目に取り上げられ、今年度からは本格的な普及に向けて、 伊豆大島で大規模な試験栽培がスタートします。

今後は、第2期以降の新品種(図2)も順次育成し、最終的には花の色や形などでバラエティ のある 10 品種程度のシリーズとする予定です。(園芸技術科)



シルキーホワイト

クリアピンク (品種登録出願番号 33764) (品種登録出願番号 33765)



パールピンク

(品種登録出願番号 33766)



図1 第1期3品種のブバルディア(東京スターシリーズ)

図2 第2期以降の新品種候補

進化した「花活布(はなかっぷ)®」

~環境にやさしい商品開発と異業種とのコラボ~

農総研では、花活布プロジェクトのメンバーと共同で、屋内向けの花き商品である「花活布®」の研究を進めてきました。「花活布®」は廃棄されるやし殻を土の代わりに使用し、布の端切れを鉢としてリユースするなど、エコを目指して商品開発をしてきました。2019年には、出荷用容器に竹や紙も利用し、環境に負荷をかけない容器づくりをめざしてきました(図1)。東京農林水産フェア(2019年10月)や東京の食の魅力フェア(2020年2月)では、これらの容器を用いた「花活布®」が好評を博しました(図2)。

また、新たな展開として異業種とのコラボも実施しています。画家の真塑塗さんが製作した「花活布®」を利用した蝶のオブジェは、松坂屋美術館(名古屋、2020年1月25日~2月16日)や佐藤美術館(千駄ヶ谷、2020年1月7日~3月1日)で販売されました。(園芸技術科)







図1 竹や紙を使用した容器

図2 多彩な容器の花活布

図3 呉亜沙さんとのコラボ作品

春まきキャベツのおすすめ品種紹介

2018 年 5 月 25 日に、春まきキャベツの種苗審査会が開催されました。この審査会では、各種苗メーカーが出品した品種を農総研で栽培し、都関係者や種苗メーカーの代表者が審査し、点数を付けます(図1)。出品品種の中で、第1位には㈱日本農林社の「ノウリン交配 さつき王」が選ばれました(図2)。「さつき王」は、結球部の揃いがよく、球形の乱れも少なく、結球重が重いが外葉はコンパクトであり、立毛審査(圃場での審査)、収穫物審査(結球部を並べて審査)ともに高く評価されました(図3)。今後も都内で栽培されている主要品目の種苗審査会を行い、優良品種の情報提供をしていきます。(園芸技術科)







図1 審査 間場

図2 「さつき干」の牛育状況

図3 「さつき王」の結球部

春の訪れを告げる新樹種

農総研立川庁舎にある樹木の見本園「新樹種園」は、平成 13 年に造成され、400 以上の樹種が植栽されています。農総研では、新樹種園にある樹種について、生育特性、鑑賞特性などを調査しています。今回は春の訪れを感じさせる 3~5月に開花する樹種をご紹介します。

ミヤマガンショウ(図1)は3~4月にかけて白い大きな花をつけます。香りがとても良く、目と鼻で楽しめる樹木です。ロドレイア ヘンリー(図2)は3~4月に薄紅色の花を咲かせます。下向きに花をつけるので、見上げることでその美しさが際立つ樹木です。ヒトツバタゴ(図3)は4~5月にたくさんの白い小さな花をつけ、見ごたえのある樹木です。

新樹種園は365日一般公開しています。都民の皆様のご来訪をぜひお待ちしております。



図1 ミヤマガンショウ



図2 ロドレイア ヘンリー



図3 ヒトツバタゴ

江戸東京野菜ツルナに発生した新しい病気

ツルナは江戸東京野菜の一つで、主に日本料理の椀物やお浸しなどで利用されています(図1)。 古くから江戸の料亭街近辺(現在の足立区)で盛んに栽培されてきましたが、近年、12~3月に 原因不明の立枯症状が発生し問題となっています(図2)。調査を行った結果、この症状は「菌 核病」が原因であることが確認されました(図3)。この病気は冷涼かつ高湿度な環境で発生し やすいため、冬季の灌水回数を減らし、植物の通気性を改善することによって被害を軽減させる ことができます。また農総研では、各種農薬の効果と有効農薬の残留挙動や安全性を検証し、菌 核病に高い効果を示す農薬をツルナ栽培で使用できるよう試験を進めています。(生産環境科)



図1 ツルナ



図2 葉の腐敗症状



図3 病原菌の子のう盤(左) 菌核(右) 菌核より形成された子のう盤 から胞子が飛散して伝染

畜産技術科は、東京府立種畜場の設立から 100 年を迎えました!

農総研畜産技術科と事業課青梅畜産センターは、旧東京都畜産試験場(青梅市)を前身としますが、その始まりは1920年(大正9年)設立の東京府立種畜場に遡ります。明治維新以降、外

国との交流をきっかけに発展した東京の近代的畜産を支援するため、設立当時の種畜場は現在の立川庁舎(当時の府立農事試験場)に施設を置き、家畜家きんの改良増殖を中心に技術指導や調査研究を行っていました(図1)。その後、食生活の変化、流通システムの急激な進化のなか、昭和24年に青梅市へと本拠地を移し、昭和39年の「畜産試験場」への改称を境に、改良増殖から試験研究の推進、食糧の確保から食の充実へとその目標を大きく変化させ、都内畜産振興に力を注いできました。次号では、種畜場時代から続く改良増殖について詳しく紹介します。(畜産技術科)



図1 立川市に設立された 東京府立種畜場(奥が牛舎) (立川市歴史民俗資料館提供)

食品技術センターは、創立30年を迎えます

食品技術センターは、東京の食品産業の技術的拠点として平成2年7月1日に秋葉原に開設され、まもなく30周年を迎えます(図1)。食品加工技術に関する試験研究をはじめ、中小企業との共同開発研究等を通じて、生ソース、大豆テンペチョコ、日本酒等の新製品開発に力を入れ、食品業界の発展に貢献してきました。また、企業の皆様からのご要望に応え、技術相談、試験機器の貸出し、技術者研修会や講演会、成果発表会の開催等の幅広い事業も実施しています(図2)。

平成 18 年度からは農林総合研究センターに所属し、新たに都民の 食の安全と食生活の充実をめざし、都内農産物の高付加価値化や加工 利用にも取り組んでいます。平成 30 年度には利用者のご要望にお応 えして、設備改修工事や貸出機器の充実強化を行いました。

都内企業の製造した食品には、食品技術センターがこれまでに開発 した技術が活用されているものがいくつもあります(図3)。お店で お見かけした際は、ぜひお手に取ってみていただければ幸いです。



図1 開所式



図2 技術者研修会



図3 開発技術活用例 (生ソース、大豆テンペチョコ)

(食品技術センター)



育てます豊かな食とみどりの東京

公益財団法人 東京都農林水産振興財団 農林総合研究センター

〒190-0013 東京都立川市富士見町3-8-1 HP: https://www.tokyo-aff.or.jp

TEL: 042-528-5216 Twitter: @tokyo_tdfaff

こちらの QR コード からご覧ください

